

平成25年度第2回あきた総合支援エリアかがやきの丘運営委員会 議 事 録

○日 時：平成26年2月5日（水） 14:00～15:30

○場 所：秋田きらり支援学校 大会議室

○出席者：堀井委員長、柴田委員、嶋崎委員、加藤委員、遠藤委員、大日向委員、佐藤委員、福田委員

1 開 会

2 委員長あいさつ（堀井委員長）

あきた総合支援エリアが開設して、まもなく4年が経過することになります。この4年間、秋田県は地域的に多少ばらつきがあるものの、毎年豪雪が続いております。特に今年は横手、湯沢等の県南地域が大雪に見舞われ、政府の調査団も明日、秋田に来て現地の視察を行うことになっております。このかがやきの丘も高台にあり、寒さも厳しい状況にありますが、子供たちが風邪をひかないようあるいはけがをしないような安全・安心な施設づくりに取り組み、そうした意識を大切にするよう職員の方々には徹底していただきたいと思っております。

県では、東日本大震災を受け、防災に対する様々な取組を進めております。大震災の経験から、地震、津波等に対する防災意識は持っておりますが、昨年は、仙北市での土石流災害、由利本荘市矢島での道路崩落事故のような土砂災害によって11名もの方々の命を失ってしまっております。こうした災害、あるいはインフルエンザの罹患等、リスク管理は幅広いものであることを常に忘れることなく、対策に取り組んでいかなければならないと思っております。

今年度については、南ヶ丘ニュータウンにおいて、消費税増税前の住宅建設が増加していると伺っております。これまでは、毎年7～8戸前後で推移しておりましたが、今年度は20戸を超える見込みであります。

また、医療療育センターについては、5年ごとに中期計画を策定し、それを5年の節目で成果を検証することを重ねていくこととなりますが、来年度が第一期の最終年度で、開設以来の全県の小児療育のネットワークの拠点としての取り組みの集大成ということになります。また、27年度からの第二期の中期計画策定に向けての年でもあります。

かがやきの丘の開設から4年目を迎え、皆様には、この委員会の二期目の委員として就任していただいております。今回が二期目の最後の委員会となります。開設にあたって、様々な議論がなされ難産だっただけに、エリアの発足に安心して、その後の運営に気の緩みが出てしまわないかという若干の懸念もありました。我々は、3校と医療療育センターとの連携、あるいは3校の連携がうまくいき、全国のモデルとなるような施設・学校にしていきたいという質の高い理想を持っております。その実現に向けて、この委員会で皆様からの御意見、御提案を受けて運営に役立てたいという思いから、この委員会を発足させまし

た。皆様の御意見を参考に、スタッフの方々に努力を重ねていただいたことにより、理想にかなり近づいていると個人的には評価しております。そうした意味でも、今回の委員会については、4年間の締めくくりの委員会にしたいと考えております。皆様からの御意見はこれからも頂戴したいと考えておりますが、発足後4年間の施設運営に対する集約的な御意見も頂きながら進めてまいりますので、よろしく申し上げます。

3 議 事

(1) 報告

①平成25年度の成果と26年度へ向けての課題

- ・医療療育センターと特別支援学校の連携について
- ・相談支援、総合支援の機能について
- ・地域開放、地域交流について
- ・他の医療機関及び教育機関との連携について

②第1回運営委員会で協議された事項について

- ・防災体制の整備について

③その他

- ・第59回全国肢体不自由教育研究協議会秋田大会について

(2) 協議

福田委員 ○ 資料2に関し、総合相談・地域療育支援部の療育相談、発達障害者支援部の家庭生活相談の相談実績件数が、大幅に増加した理由を教えてください。

事務局（室岡・発達障害者支援センター長）

- 就労相談、教育相談等については、専門的なシステムで対応可能な関係機関に対応を依頼できるようになったが、家庭生活相談の実績件数が増加している理由として、実際にそのような機関に相談に行く前に、子供とどう向き合っていけばいいのかを相談できる機関がないので、発達障害者支援センターを頼って相談される方が多いと認識している。

堀井委員長 ○ 課題として地域との連携を挙げているが、現状はいかがか。

事務局（室岡・発達障害者支援センター長）：

- 発達障害者支援部については、対応すればするほど課題が出てくるといことが現状である。発達障害の普及啓発については、当初からの課題として積極的に取り組んできたが、発達障害だということが分かったもしくは疑われる場合に、誰がどのように動けばいいのかということに関しては、支援していただける機関を探して連携を取ってはいるものの、子育て、親子関係、ひきこもり等に関する機関との連携については、十分に連携が取れていない部分がある。
- また、地域によって各機関の体制が若干異なり、実際に現場へ行ってみ

ないと分からないことがある。巡回相談で、支援の対象になる方や今後つながっていきそうな機関の方と直接会うことで、具体的な支援に取り組んでいきたいと考えているところである。

遠藤委員 ○ 療育相談の実績件数の増加に関し、以前は診療部で医師が診察し、セラピストが訓練を行う方式が主流であったが、カルテを作って医師に診てもらい相談よりも、総合相談・地域療育支援部という1つの部門において、ケースワーカー等が相談を受けるような在り方が徐々に浸透してきたことによるのではないか。

柴田委員 ○ 資料4に関し、県内に歩行指導員は何名程度いるのか。また、歩行訓練士とは異なるものなのか。

事務局（中村・盲学校校長）

○ 歩行指導員については、教員が社会福祉法人日本ライトハウスへ研修に行って、資格を取得している。現在、盲学校には4名の有資格者がいるが、来年度はさらに1名が研修に行く予定である。現在のところ、県内の歩行指導員は本校の4名のみである。

堀井委員長 ○ 歩行指導員の有資格者は、全県でこの施設にしかないのか。

事務局（中村・盲学校校長）

○ 資格を保有し、実際に指導できる者は、本校の4名のみである。

柴田委員 ○ 現状で人数は足りているのか。

事務局（中村・盲学校校長）

○ 大都市のリハビリテーション施設には、歩行指導員が複数名配置されているが、本県の場合は、これまで有資格者がいなかったことにより、盲学校から4名研修に行かせていただいた。4名では不足することもあるが、実際の指導に当たっては、その4名が他の職員に対して研修を行った上で、他の職員も指導に携わっている。

堀井委員長 ○ かがやきの丘の発足にあたっては、きらり支援学校、盲学校、聾学校のそれぞれの教育、ケアをこれまで以上にレベルアップさせていくというねらいもあった。そうした意味で、歩行指導員による指導は成果と思われるが、これまでの各学校の成果と課題としてはどのようなものがあるか。

事務局（中村・盲学校校長）

○ 成果としては、移転の際に新たに幼稚部を開設したこと、また、専攻科に生活情報科というQOLを向上させるための学科を新設したことが挙げられる。全国の早期教育研究会の発表等からも、本県の視覚障害を持つ乳幼児への教育的対応については、既に全国レベルであると考えている。生

活情報科については、全国でも本県のみでの設置であり、他県からも教育方法についての問い合わせが増加している。

事務局（濱田・聾学校校長）

- 本校では、職員の専門的技術の向上のために、言語聴覚士の養成に取り組んでいる。現在、仙台医療福祉専門学校に1名が研修に行っており、2月末に国家試験を受験予定である。合格すれば、聾学校教諭のうち3名が有資格者となることとなる。4月からはさらに1名が研修予定である。平成28年には、聾学校の職員のうち、4名が言語聴覚士の資格を有し、様々な専門的教育を行っていく予定である。
- 聾学校の在籍生徒数は現在43名であるが、地域の小・中学校には難聴学級があり、中学部・高等部になると聾学校へ入学する生徒が増えてくる。現在、地域の小・中学校に通っている聴覚障害児にとってのセンター的施設として、本校が専門的な指導の支援を行うことができるよう今後力を入れていきたいと考えている。

堀井委員長 ○ 県内の小・中学校に聴覚障害児は在籍しているのか。

事務局（西嶋・特別支援教育課長）

- 小・中学校にも在籍しておりますし、特別支援学校の中にも、知的障害と聴覚障害を併せもっている児童・生徒が在籍しているケースがある。

堀井委員長 ○ きらり支援学校の成果と課題はいかがか。

- 大日向委員 ○ 医療療育センターとの連携により、理学療法士、作業療法士等の専門的知識を有した職員の方々から、今年度はこれまでで最も多い約150回の御指導をいただいた。それが授業づくりにも効果として現れている。
- また、開校当初から毎年、学校評価を行っている。保護者からの厳しい評価を真摯に受け止めることが大事であると考えている。保護者アンケートの項目は全部で23項目あり、開校時からの課題として、地域からの理解、地域の学校との交流、盲学校・聾学校・きらり支援学校3校間の交流、医療療育センターとの交流に関する項目の満足度が、当初は40～50%と低かった。しかし、1年ごとに5～10%程度満足度が上昇していき、現在では70%以上の満足度を頂いている。これは各学校、医療療育センター、地域の方々と一緒に歩んできた成果だと、とても感謝している。しかしながら、他項目と比べるとまだ低いことから、今後さらに一頑張りすることによって、保護者、地域の方々から、より喜んでいただける施設になるのではないかと考えている。

堀井委員長 ○ 地域からの理解及び交流は、発足当初から懸念されていた課題であったが、かがやきの丘祭りはすばらしい夏祭りになってきていると感じており、また、上北手小学校との交流も年々盛んになってきている。これは職員の方々の努力、保護者の方々の御協力のおかげではないかと思っている。今

後もぜひ頑張っていたきたい。

福田委員 ○ 地域からの理解を得るという点で、エリア見学会を実施したことは非常に大きな一歩だと感じたが、休日に見学会を実施してほしいとの要望もあるようだ。休日に開催することは課題も多いと思うが、地域の方々が一度はかがやきの丘に来たことがある、という状況を目指す上で、ぜひ前向きに検討していただきたい。

堀井委員長 ○ 各施設の休日の利用状況はどうなっているのか。

遠藤委員 ○ 医療療育センターは、休日の外来診療は行っていない。病棟は、重度障害の方が大半なので、平日と同じ状況である。救急外来は行っていない。

堀井委員長 ○ 学校の生徒は、休日も寄宿舎にいるのか。

事務局（濱田・聾学校校長）

○ 希望する子供は日曜日の午後から寄宿舎に戻ってきている。部活は休日にも行っている。

事務局（竹越・きらり支援学校主幹）

○ 大体育館、多目的ホール等は、年末年始を除き土日、祝日に地域に開放しているので、ぜひ利用していただきたい。

大日向委員 ○ 体育館は非常に人気があり、年間を通して予約で埋まっている状況である。グラウンドも同様である。

堀井委員長 ○ 4年間を振り返ってみて、他に意見はないか。

遠藤委員 ○ 各学校と医療療育センターとの連携は、非常によく取れていると思う。医療療育センターとしては、医師不足が一番の悩みの種である。秋田市内では、日赤、市立秋田総合病院、全県的にも5～6か所の病院で眼科の医師が不在のようだ。医療療育センターにおいても、秋田大学から、眼科医を1名派遣していただいている状況である。小児科の医師も減少してきており、以前のように秋田大学から医師を派遣していただくことが厳しくなっている。

堀井委員長 ○ 医療療育センターにおいても、医師不足が課題となっているとは考えていなかった。今後もこのような課題には直面すると思うので、しっかりと受け止めて対応していきたい。盲学校、聾学校、きらり支援学校3校の連携については、開設当初は課題だと考えていたが、現在は順調であると認識してよいか。

大日向委員 ○ 当初、その点は最も心配いただいていた点である。子供はすぐに仲良く

なれる。子供が仲良くなると、職員もすぐ仲良くなり、自ずと保護者も仲良くなっていく。この4年間、子供に引っ張られながら3校は足並みがそろい、連携が深まったと感じている。子供や職員と違い、年に数回しか顔を合わせない保護者の方々が、力を合わせるのには並大抵のことではないと思っている。PTAに出席するだけでも大変だと思うが、かがやきの丘祭りでは3校それぞれの保護者の方々が、力を合わせて子供をバックアップした。

- また、昨年度はきらりおやじの会が雪像作りを中心になって行い、子供達へすばらしいプレゼントをした。今年度は、医療療育センター、盲学校、聾学校からもバックアップしていただいた。これも子供の力だと思っている。

堀井委員長 ○ 県内各地域において、特別支援学校の不足または定員が少ないという状況にあると伺っているが、大曲養護学校せんぼく分教室は、今後分校となる予定となっているのか。

事務局（西嶋・特別支援教育課長）

- 平成28年度から分校となる予定である。

堀井委員長 ○ かがやきの丘は、県内の特別支援教育のセンター的機能を持っていかねばならないと考えているが、県内各地の特別支援学校との連携はどうなっているのか。

事務局（西嶋・特別支援教育課長）

- 連携には様々な形がある。学習指導面では、障害種別によって学校があるが、地域の中で子供を育てたいという保護者が多くなってきており、知的障害を主とする特別支援学校の中に、知的以外の障害を持った生徒が多くなってきている。そのため、知的障害以外の視覚、聴覚及び重度の身体障害等の専門的な事項を学んでいただけるよう連携を取っている。
- また、盲・聾学校は、全県でサテライト教室を毎週のように行っているが、今年度、きらり支援学校では、各小・中学校の特別支援学級を訪問している。

堀井委員長 ○ よろしくお願ひしたい。

加藤委員 ○ 東日本大震災以降、全国や北海道・東北地区の肢体不自由児教育研究協議会に出席させていただいて、様々な地域の取り組みを知った。他県の方々と交流することによって、本県のおかれている立場や現状を初めて認識できたと感じた。予算等の関係もあり、それ以前の大会には出席していないが、個人的には自費でも出席したいと感じたところである。学校へ持ち帰った資料や情報等は、結果的に子供の教育に反映されていると思う。

- 今回、当県で開催された協議会においても、本県の取り組みは評価していただいたと感じている。県外から人を呼び、また県外へ出て行くことに

より情報収集することによって、学校、地域等にフィードバックできれば、よりよい方向へ向いていくのではないか。

堀井委員長 ○ 今まで、盲学校、聾学校、きらり支援学校3校の連携、また3校と医療療育センターとの連携、さらに地域との連携等を念頭においていたが、今後は、県という枠を越えて、全国の様々な取組内容を吸収し、フィードバックしていくことは大切だと考える。

嶋崎委員 ○ 親の会は現在休止状態で、残っていた予算は今年のクリスマス会で全て使ったところである。親の会の主な活動としては、かがやきの丘祭りの出店とクリスマス会である。来年度以降も子供に楽しみを持ってもらいたいという思いから、かがやきの丘祭りへの出店等については継続したいと考えている。何かよい方法があれば皆様から御意見を伺いたい。

堀井委員長 ○ かがやきの丘祭りは本当に素晴らしいお祭りで、保護者の方々の全面的な応援がないと、開催できない行事であると考えている。

事務局（石原・医療療育センター長）

○ 個人的な意見であるが、現在、親の会を保護者のみで存続させることは困難だと感じている。太平療育園時代の親の会の活動は、職員が中心になって行い、莫大な時間がかかっていた。職員が行うことは本末転倒だからやめろと言われたが、これだけは続けたいと押し切っていた。会報、報告書の作成等は全て職員が行っていた。

○ 地方独立行政法人化したことによって、職員が親の会の活動を行うことができるのではないかと期待したが現状は難しい。職員が親の会の活動を行うことが本末転倒だと言われているが、親の会がなくなることのほうが本末転倒だと個人的には感じる。療育は、親が一緒になって頑張らないとうまくいかないものである。学校におけるPTAと同じであると考えている。親の会については、職員も交えて新たな姿を検討することが必要だと考えている。

堀井委員長 ○ 参考になる意見だと考える。職員の方々と協力しながらそうした体制作りを考えることは、大きな価値のあることだと個人的に思う。職員も交えて検討することが望ましいのではないか。

（3）その他

堀井委員長 ○ 最初に申し上げたが、2期4年にわたって開催してきたこの委員会だが、当初この委員会を立ち上げた際のねらいは、概ね達成できたのではないかと率直に感謝している。新年度は、医療療育センターにおいては、第一期中期計画の締めくくりの年であるとともに、第二期中期計画策定の年であり、各学校においては、今後力を入れて取り組まなければならない課題が多々あると思う。実務的には、相互の意見交換あるいは保護者の方々からの意見を聞かせていただく取組については、これからも継続していただき

たいと考えている。これからもスタッフが中心となり、充実したかがやきの丘となるようさらなる御努力をお願いして、この委員会は今回をもって閉じさせていただきたいと思うが、いかがでしょうか。

委員一同 ○（異議なし）

堀井委員長 ○ 御尽力はこれからも賜りますので、御協力をお願いします。ありがとうございました。

4 閉会

事務局（佐藤・障害福祉課長）

- 長時間にわたり御協議いただき、ありがとうございました。本日の協議の中では、4年間の大きな成果をはじめ、今後の課題に対しても貴重な御意見、御提言をいただきました。今後のことにつきましては、委員長も言われたように、実務者レベルの会議の開催も含め、事務局で検討したいと考えております。委員の皆様には、2年間あるいは4年間のお役目を終えていただくこととなりますが、これまでの御協力に改めて感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。